

■研究調査レビュー

与論町での資源ベース理論によるエコツアー実践の可能性

—— 地域志向型課題解決 ——

市川 英孝（鹿児島大学法文学部）

1. はじめに

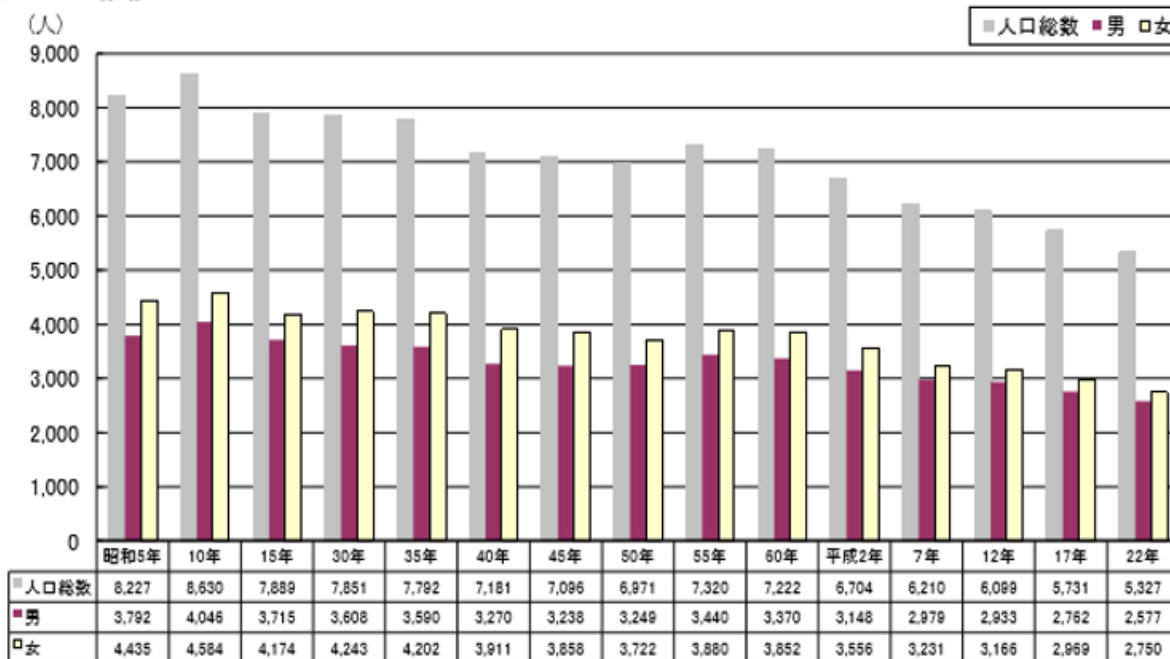
地方、特に離島では地域活性化の方策の一つとして、それらが持つリソースをどのように活用すべきか。多くの地域で地方活性化の名のもとにいろいろな取り組みがされてきたが、その明確な成果は現れていない。最近、エコツアーが多くの地域で実施され、エコツアーにより観光客を増加させようと試みられている。ただ成果を実現するには間断ないエコツアーを提供しなければならない。

多くの過疎地域において、地域活性化のために地方のリソースをどのように活用されるべきか。この問題は過疎地では共通解として、なかなか明瞭にはならない課題となっている。そのようななか、学生が与論町で活用される可能性を見ることにより、他の地域でもどのように活用されるべきか考える機会を提供できると考える。離島が持つリソースはそこに住む人にとっては大きな価値とは考えられなくても、外からやってきた人にとっては大きな価値と受け取られることもある。

そこで本論文では、与論町で実施可能なエコツアーによる地方活性化例を考察する。与論町がもつ観光資源を利用し、地方活性化へつなげる施策を学び、さらなる活性化と他地域への展開を可能にする方策について、学生による地域志向型課題を解決してもらう。

◆人口の推移

(出典：平成 28 年度町勢要覧)



◆産業別就業者数（15歳以上）

（出典：平成28年度町勢要覧）

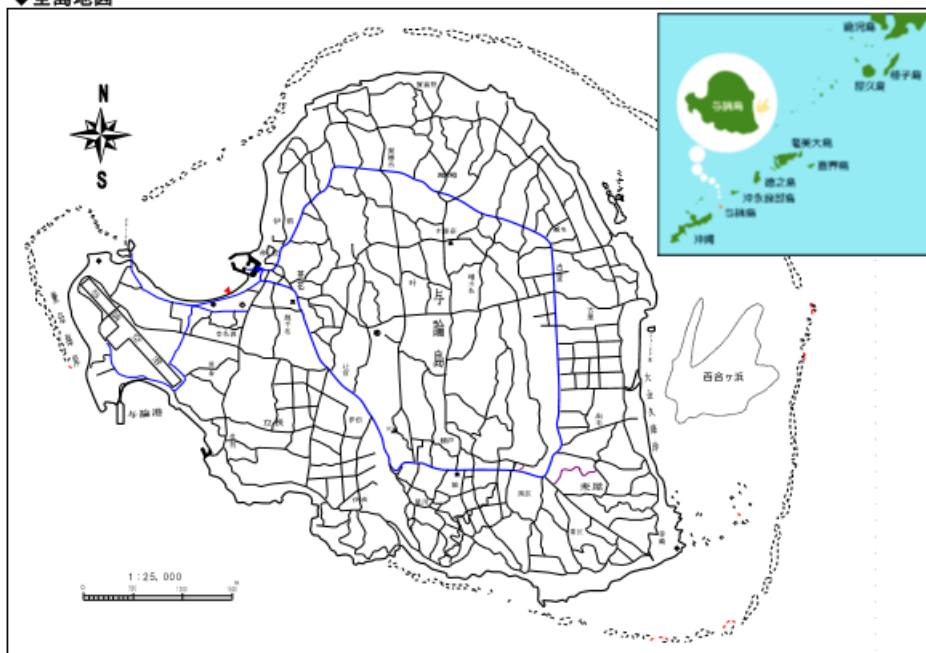
産業分類	昭和50年	昭和55年	昭和60年	平成2年	平成7年	平成12年	平成17年	平成22年
農業	1,000	985	911	953	896	988	887	732
林業・狩猟業	0	0	0	0	0	0	0	0
漁業	33	34	44	38	48	55	62	46
鉱業	8	1	2	0	0	0	0	0
建設業	151	251	224	269	345	321	303	227
製造業	1,193	1,113	930	520	213	165	191	142
卸売小売飲食店	259	439	434	421	376	430	572	492
金融・保険・不動産業	13	10	13	17	20	12	14	23
運輸通信業	81	103	132	116	93	107	96	109
電気・ガス・水道業	13	18	20	22	28	24	19	16
サービス業	377	570	554	650	691	779	693	655
公務	118	122	133	140	173	161	153	152
分類不能の産業	0	0	0	0	0	0	1	10
総数（人）	3,246	3,646	3,397	3,146	2,883	3,042	2,990	2,604

2. 与論島が置かれている状況

与論町の現状としては、人口の推移のグラフを見ても明らかなように、人口は右肩下がりとなっている。与論町には高校があるので、卒業後に町外へ出ていくことが多い。平成28年3月卒業生（61名）のうち、4年制大学、短期大学、各種専門学校へ進学するものは、約82%の50人であった。もちろん島外へ出ていくが、就職した9名についても、必ずしも島内にとどまるわけではない。その点に関しては、多くの過疎地域と同様に18歳人口の落ち込みがある。産業別就業者数の表を見てみると、もっとも多いのは農業であり、次の観光や飲食のサービス業となる。その受け皿は少なく、また安定した職種は公務員などに限定されてしまう。農業の従事者は減少傾向となっている。

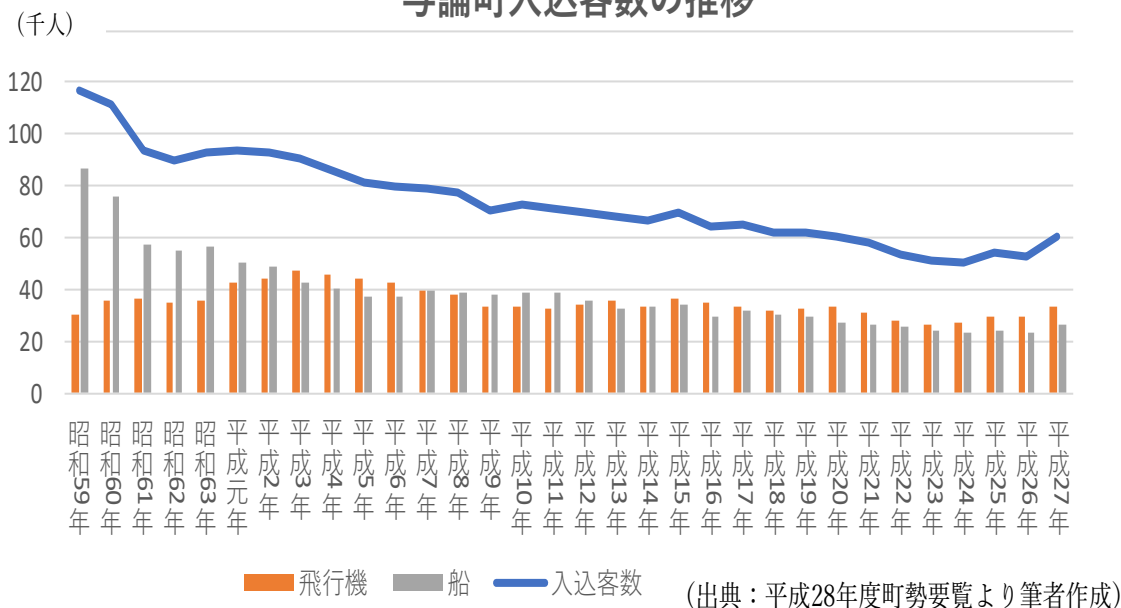
ヨロン島
観光協会
HPによると
与論島は、
「鹿児島
県の最南端
にある奄美
群島のひとつ
です。沖縄
本島まで
約23kmな
ので、沖縄
からのアクセ
スも大変
便利です。

◆全島地図



サンゴ礁
が隆起してできた島なので、白い砂浜と透明度の高い海は「東洋の真珠」ともいわれています。また、条件が揃った時にしか姿を現さない「百合ヶ浜」は、辺り一面がエメラルドグリーンに

与論町入込客数の推移



輝く海の色と白浜でまさに地球の楽園。訪れた多くの方々に魅了されています。

鹿児島県ですが沖縄県との関係も深く、薩摩と琉球を融合した独自の文化があります。

伝統芸能の「与論十五夜踊り」は、国指定重要無形民俗文化財に指定されており、後世に継承され続けています。

また、ゆったりと流れる島時間の中で、島人（しまんちゅ）の温かさを感じていただけると思います。」

と述べている。

地理的には、鹿児島県においてもっとも最南端の町であり、上記にもあるように、沖縄との関係性が非常に深く、沖縄が戦後のアメリカ領である時代においては、物資を沖縄から供給するなどの密貿易が行われていたという。もちろん与論町が沖縄統治下時代には、日本文化が入り込む余地もなく、1953年12月に本土復帰するまで、アメリカの一部であった。ある日を境に統治者が変わったからといって、すぐに風土が変わることはなく、特に戦後の困窮した環境のなか、アメリカによる統治はある意味幸せであり、日本本土復帰といってもその当時の日本はまだ経済状態は不十分であり、最南端の町に施策を実施するといった状況ではなかっただろう。そういったなか、町民は生きるためにアメリカ統治下の沖縄にその術を求めるしかなかったのだろう。

ただ時代が推移していくにつれ、日本最南端の島、として、着目を浴び始めると、多くの観光客によって島もそれなりに経済的活況を帯びることになってきた。与論町入込客数の推移をみると、昭和59年からのデータしかないのですが、それ以前はわからないが、グラフから推測すると、観光客が押し寄せた時代から、右肩下がりになっていると考えられる。現在の与論町へは、毎日1便の鹿児島からと沖縄からの航空機、鹿児島と沖縄航路の船、による手段しかない。そのため、1日の入込数に限界があるので、受け入れ側の宿泊先も減少傾向であり、以前鹿児島から毎日3便航空機があったころと比較すると、大型ホテルは相次ぎ廃業し、民宿が細々と経営を続けている程度になってしまっている。

そのようななか、観光バブル時のような、大型観光バスで移動するような観光客型ではなく、これからの地域密着型の観光を目指し、個人客相手に、モノからコト消費への移行に対応した、

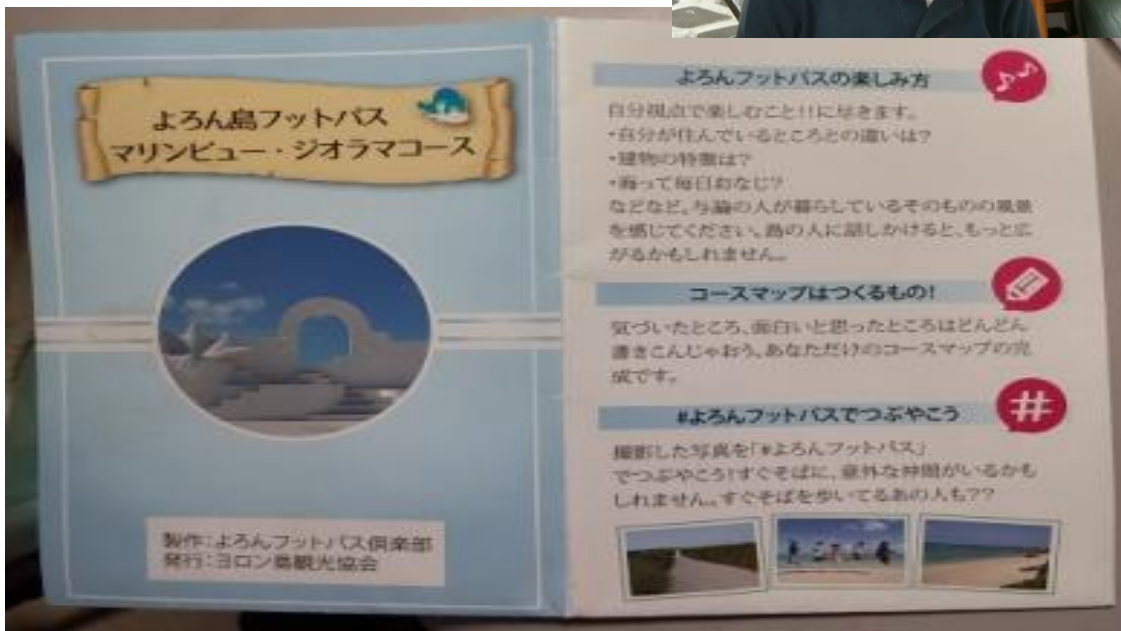
マス対応型観光を目指して行く必要がある。それを実践する一つの手段がエコツアーであると考えられる。

3. エコツアーの事例

エコツアーとは、自然環境を対象とした、観光と学習を融合したものである。世界自然遺産に登録されている地では、積極的に観光手段として利用されている。ちなみに、日本では1993年に初めて登録された、屋久島と白神をはじめ、知床、小笠原の4地域である。特に屋久島では、縄文杉への登山だけでなく、白谷雲水峡などへ登山などあらゆるコースがあり、それをエコツアーへ結びつけることで、多くの層を屋久島へもたらす役割を果たしている。特に、自然との共生がうたわれる自然遺産に関しては、エコツアーとの関係性はより高まる。小笠原では、その自然を活かしたコースを作っている。小笠原諸島における固有の生き物が独自の進化を成し遂げた結果の独特な生態系、固有種を守り、観察できるコースを作り出し、そのなかでエコツアーが実施されている。また小笠原はエコツアーの発祥の地といわれている。ホエールウォッチングによるエコツアーは非常に有名で、複数の種類のクジラが島周辺に訪れ、日本の中では非常に貴重な観察地点となっている。また固有種などの観察や戦時中の史跡をめぐる陸域ガイドツアー、そして南島へのエコツアーなども充実しており、滞在するあいだに来島者を飽きさせない取り組みを充実させている。

小笠原へ来るスケジュールは東京出発後24時間で父島に到着し、3泊ののち、24時間かけて東京へ戻る。すべての来島者がこのスケジュールに沿って過ごすため、小笠原に滞在する丸3日の間にいかに来島者が満足できるか、そしてリピーター、もしくは伝道者になり新たな来島者を作り出すような仕組みが必要となる。小笠原が持つリソースである自然を前面に出し、かつ自然保護の観点に立ち、それに共鳴するファンづくりがさらなる来島者につながっていくと期待される。

このように地域がもつリソースは地方だからといってどこでも同じではない。これまで地域活性化ではどの地域でも金太郎飴状態になってしまっていたが、与論独自のエコツアーを評価する機会となり、



他の地域での展開が期待できる。与論町でも、地域のリソースを活用し、エコツアーを実施しようと計画がたてられていた。計画しているリーダーが阿由葉辰夫さん(前頁上写真)である。阿由葉さんは、与論島とギリシャをつなぐ橋渡しの役をされ、町全体のコンセプトとしてミコノス島をイメージとした街づくりを目指したという。与論の雰囲気は非常にミコノス島に近く、建物も白塗りにして、与論島を訪れる観光客にとって日本にある南の島が持つ一般的なイメージではなく、差別化をはかったという。その阿由葉さんが、与論島に来る観光客に飽きさせないよう、そして与論島が持つリソースに依拠した観光を新たに提案したものが“よろん島フットパス”(前頁下写真)である。与論島がもつ海岸線の魅力を絶対的な価値として設定し、潮がひいたときに60の浜が出てくるという現象を前面に出し、干潮時の海岸線を歩くことも想定し、そして街中の散策を含めたコース設定をしている。ハブはないし、交通量も多くないので安心・安全で与論島を回ることができる。海側をみればオーシャンビューであり、その陸側では一転断層がむき出しになっていたり、与論島が出来上がる歴史も垣間見れるそうだ。将来的には産業とも結びつけることを想定しており、島全体での活動に結びつけることを計画している。

一般的なエコツアーでは、ガイドを付けて、普段歩けないところや、知らないことをレクチャーしてくれるが、与論島で計画されているエコツアーでは、ふらっと観光に来た方が、島を回りたと思ったときに、気軽に、一人でも歩き回ることができるよう、考えられている。

4. 与論での学生による地域志向型課題解決

離島での課題は多い。しかし学生の多くは離島を訪問したこともなく、島民が思う課題に対して学生が実際訪問して、経験することは非常に重要だと考える。今回法文学部経済情報学科の学生4名が与論町を訪問し、計画が予定されているエコツアーを体験した。

該当の4名の学生は、初めて与論町を訪れ、限られたリソースの中でどのような環境であれば与論町が観光地の対象として選択されるのか、考える機会となり、これまで考えることのない地域・離島の問題を意識することを目的とした。

この「よろん島フットパス マリンビュー・ジオラマコース」でエコツアーを説明し、観光客が回るコースを紹介している。それに従い、学生は二つのコースをまわり、短い時間ではあるが、与論町での主要な観光地や、自然、歴史、文化、食などを体験できる。

フットパスとは「イギリスを発祥とする『森林や田園地帯、古い街並みなど地域に昔からあるありのままの風景を楽しみながら歩くこと【Foot】ができる小径(こみち)【Path】』のことです。イギリスではフットパスが国土を編みの目のように縫い、国民は積極的に歩くことを楽しんでいます。」と“よろんフットパス島”に説明がある。コースには、ロングとショートの二コースがある。

・ロングコースは、
ヨロン島観光協会 →ウドノスビーチ →ギャラ
リー海 →グリーンハウス →ハレルヤこども園
→品覇海岸 →よろん焼大壺 →原生林 →さび
ちら館 →ハジピキパンタ →茶花市街地 →ヨ
ロン島観光協会 を回る。

・ショートコースは、



ヨロン島観光協会 →王者の椅子 →コースタルリゾート →銀座通り →与論町立図書館
→ギャラリー海 →ウドノスビーチ →ヨロン島観光協会 を回る。

与論について知ってもらうために、ロングは約4時間、ショートは2時間と、体験者の体力に合わせて回れるように作られている。このように、与論町において計画されているエコツアーについては、他の地域のエコツアーとは異なり、ガイドと一緒に回るというものではない。おそらく、屋久島などのガイドと一緒にいないと登山初心者にとって危険があるような環境ではない。一般の人が歩いて回れることができるのが与論町であり、島の雰囲気やゆったり感じてもらおうことを意図しているのだろう。

5. 与論でのエコツアーの可能性

奄美や甌島ではエコツアーが計画され、実施されている。それらの地域でもつ観光リソースをいかに活用するか、そして観光地としての選択をしてもらう、手段の一つとなっている。与論町でもエコツアーが計画されており、与論町で滞在する際のきっかけの一つとして考えられている。しかし、奄美などと比較して与論島は多くの地域で開拓されており残された自然が少ないという。その環境下、他の地域ではない与論島がもつきれいな海も利用して、エコツアーが計画されている点は非常に興味深い。

今回は、計画されている2コースのエコツアーを学生が周り、これまで与論島について偏見がない彼らが、想定される観光客として実際に魅力的なコースであるか、もし不都合な要素があれば、それを率直に提案することができた点が、非常に成果として評価できる点である。

与論島は限られたリソースの中、大型飛行機が就航した沖縄本島や石垣島、宮古島などとは異なり、プロペラ機が鹿児島、沖縄から1日1便という不便な状況で、その魅力をいかに提供でき、他の地域とは差別化できるかがこれからの生き残り策となるだろう。その点で、計画されているエコツアーが与論町の魅力を引き出すきっかけになると考える。

与論島でのエコツアーがこれから展開されるため、実際にこの計画がその目的に合致するかである。与論町では、ダイビングなどの海域アクティビティは充実しているが、陸域でのアクティビティはあまりない。エコツアーはその状況を打開し、与論町の文化、歴史面を発見させてくれる機会でもあるため、観光客がリピーターとなってくれるような内容へ貢献することが今後の課題である。

今回のフットパスは、これから実施段階へと進むだろう。大規模な観光施設もないなかで、与論島が今後どのように観光客を満足させ、リピーターとなり、そこから新たな観光客を作り出していくのか、このサイクルを継続することが与論島にとっては重要であるが、その一端をフットパスが担うであろう。そのためにも、海域だけでなく、陸域のアクティビティの充実が必要不可欠であり、今の与論島でできることは都市圏における大型観光施設ではない。そうであるならば、わざわざ時間をかけて与論島まで来ることはないだろうから。与論島のリソースを観光客にしっかりアピールできることが重要であり、島の人にとってではなく、島の外の人にとって魅力に映るリソースを発見、作り出すことが今後の与論島への観光客を維持し、さらに夏のシーズンだけでなく、通常であればオフシーズンである冬の期間であってもフットパスがあるから訪れる、という施策にすべきだろう。

次章では、実際に回った学生の声を反映することで、この可能性の証明としたい。

6. 学生の声より

与論島ならびにフットパス、そして彼らを感じた点について抜粋していく。

・与論町について

「島に着きまず思ったのは、11月にもかかわらず気温が高いということだ。こちらに滞在している間、何度も海に入る機会があったが、とても過ごしやすく、現地の方によると、4月から11月までは海パンひとつで海水浴が楽しむことができるのだという。温暖な気候であり、本土とは比べ物にならないくらい綺麗な海が島を取り囲み、どこのビーチに行っても透明度の高い海が広がっていた。これはシーズン問わず、観光客を誘致することのできる大きな要素であると感じた。」そして、沖縄や奄美ではなく与論が持つ独自のリソースとして、「与論の海は自然が生み出したまま、ほぼ手をつけられていないということ」を挙げている。この点は、沖縄など大型観光施設ではなく、与論の規模に合わせて、観光を合わせ、それが観光客にとって魅力を高めることができるのではないかと感じた。

・フットパスについて

「コースの中にウドノスピーチが組み込まれている、ここは駐車場からしばらく茂みの中を歩かなくてはならない。茂みを抜けた瞬間に目の前に広がる光景は、澄んだエメラルドグリーン色の海が広がっていて、波の音が心地よい。また、時間帯によっても海の醸し出す雰囲気は変化していく。ミコノス通りのそばにある茶花海岸には、砂浜のステージという大きな建造物がある。ここから見る夕焼けは黄昏るにはぴったりの場所である。また、与論島には、沖縄ほどの情報がないため、インターネットの情報に左右されず、お気に入りの景色、場所を自分で見つけられるという点でもかなり魅力的であると感じた。」

・与論のこれからについて

「与論島の魅力といえば一言で海だといわれるが、もう一つ感じたことは、与論島は一周40分で回れる小さな島であるということもあり、島民の方同士の関わり合い、旅先の人へのもてなしがあたりかという点だ。(中略) 島民同士も顔見知りの方が多いとのことで、小さい島であることこそそのコミュニティを感じる事ができた。観光客としてではなく、一島民として島で生活できた気がする。しかし、島を訪れてみて、観光ブームの復興に必要なこととして、問題点も多くあるように感じた。一つに、与論島に行くための移動手段が不便であるということである。(中略) もう一点、我々世代の若者を見かけることが少なく、若い人材が不足しているように感じた。その分、年配の方々がお店を切り盛りして、畑仕事も元気にこなしていたのではあるが、今や、SNSが世間に与える影響は大きくなっている。若者を取り込むことによって、SNSを介して与論島のアピールにつながるのではないだろうか。」

7. おわりに

日本中で観光政策の一環としてエコツアーを実施している地域は数多い。まだまだエコツアーの認知度が低いため、エコツアーを観光ツアーと認識している観光客も依然としているだろう。これからの観光政策としては、どこにでもある、経験できる施策ではなく、その地域でしか体験できないものにし、そこに行きたい、と観光客に思わせる必要がある。最近よく言われているのは、消費者の消費傾向がコト消費に向かっているということである。モノにはお金を使わないが、体験できる貴重な機会“コト”にはお金をかける傾向がある。この点については、観光を主産業として掲げる地域にとっては、大きなチャンスとなるだろう。そのような地域にとってこそ、地域のリソースを前面に出し、地域の特徴を理解してもらい機会を売り出して行くことは、行ってみたい、さらにはまた行きたいと思わせる要因にもなる。

エコツアーは必ずしも、世界自然遺産に登録された地域のものではない。屋久島のような多様な生物系を維持していることが、エコツアー実施の必要条件ではない。日本では1年を通し

て四季があり、秋だといってもどこでも同じ景色ではない。自然は多様であり、地域の独自性が発揮できる。今回の与論島でも、自然としてはきれいな海が特徴の島であるが、海域と陸域のセットとしてアピールするなどして、与論島特有の自然を発見できるのは、今回計画されているエコツアーの売りとなるだろう。

自然だけでなく、知床のような産業を打ち出すエコツアーのような形も地域の独自性を発揮できるだろう。それにより、観光客はその地域に親近感を抱くことにもつながり、リピーターもしくは新たな観光客を呼び込む存在になるだろう。

石垣島や宮古島には羽田から直行便が飛ぶようになり、関東からの観光客にとっては容易に行くことができる観光地として認識されている。しかし与論島は、鹿児島や沖縄を経由する必要がある、時間、費用とも負担感が高くなる。それでも与論島に行きたいと思わせるものは必要になる。地域の差別化を行わなければ、与論島に期待とは思えないだろう。今回、初めて与論島に来た学生は、与論島が持つリソースを発見できた。エコツアーの感想からも、与論島のあらたな発見につながったことは明らかであり、エコツアーの実施により、与論島がもつ独自の観光資源の発掘になると期待する。

参考資料, HP

与論町統計資料 平成 28 年度町勢要覧

http://www.yoron.jp/kihon/pub/default.aspx?c_id=22 (平成 29 年 3 月 22 日閲覧)

与論町観光協会 HP

<http://www.yorontou.info/> (平成 29 年 3 月 22 日閲覧)

市川英孝 (2016) 「小笠原諸島世界自然遺産登録 5 年を迎え、その展望と可能性」, 奄美ニューズレター, 鹿児島大学大学院人文社会科学部地域経営研究センター, 2016 年 3 月, pp.6-16

謝辞

本論文の調査に関して、阿由葉辰夫さんより与論島に関して貴重なお話を聞かせていただいた。ここに謝意を表したい。